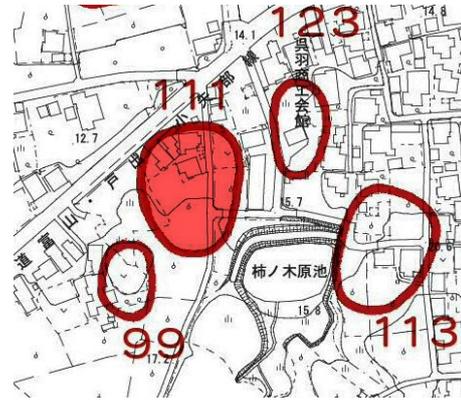


富山地域の縄文遺跡(6) 吉作遺跡

吉作遺跡の概要

立地と周辺環境 吉作遺跡は呉羽丘陵西麓の緩斜面（標高 14～17m）に立地する、縄文・奈良・平安時代の集落跡です。本遺跡の南西 1.6km に位置する古沢遺跡で見つかった縄文時代晩期の墓には石刀や土版（板状の土製品）が供えられていました。隣接する古沢 A 遺跡では同時期の巨大な高床建物跡や竪穴状遺構が見つかっています。また、その南の杉谷 64 番遺跡・杉谷 81 番遺跡のほか、南西 4.5km の開ヶ丘中山 I 遺跡（射水丘陵）でも縄文時代後～晩期の建物跡が見つかっています。このように、呉羽丘陵西麓から射水丘陵にかけての一带は後～晩期に多くの集落が営まれ、生活や信仰の場となっていました。

これまでの調査 昭和 61 年度に行われた試掘調査で縄文時代後期の竪穴建物跡や縄文土器・石器などが見つかり、竪穴建物跡等は現地保存されました。



吉作遺跡の位置 (111)

平成 25 年度発掘調査の概要

縄文時代晩期（約 2,400 年前）の吉作遺跡 土坑や谷地が見つかりました。谷地は幅 15m、深さ 1.2m で、堆積土からは縄文土器や石器が大量に見つかりました。土偶の腕や足、石刀、磨製石斧、打製石斧なども出土しました。土偶や石刀といった呪術道具は、意図的に壊されていました。調査中、谷地から水が大量に湧き出しました。当地は遺跡東側にあった開析谷の谷頭付近にあたり、水源の一つだったと考えられています。つまり、吉作遺跡を残した人々は水源付近で呪術を行った後、用いた呪術道具を壊して谷地に捨てたのです。

イノシシ形装飾をもつ縄文土器 土器などの遺物を含む地層から出土した縄文土器のなかには、イノシシ



谷地から出土した縄文土器

シをかたどった装飾のあるものが1点認められました。目は輪郭があり、位置や大きさも実物と異なるので強調された表現と言えますが、頭骨と鼻先の形状はとても写実的です。

イノシシは縄文時代早期（約 10,000 年前）から存在し、家畜化（ブタの飼育）も稀にあったと考えられています。縄文人の主要な動物質食糧（哺乳類）の一つだったからこそ、じっくり観察して写実的な土製品等を製作できたのでしょう。なお、前期（約 6,000 年前）の富山市小竹貝塚・蜷ヶ森貝塚からはイノシシの骨が、加えて小竹貝塚からは‘ウリ坊’のイノシシ形土製品も出土しています。

吉作遺跡のイノシシ形装飾にあるような斑点は、自然状態のイノシシには生じません。中期（約 4,500 年前）の富山市開ヶ丘遺跡群では落とし穴のほか、イノシシの体全体を表現したらしい縄文土器が出土しています（開ヶ丘 狐谷Ⅲ遺跡）。落とし穴はイノシシ等を対象とした罠と考えられています。開ヶ丘遺跡群でもイノシシが狩猟され、土器の装飾としても表現されました。以上から、吉作遺跡のイノシシ形装飾の斑点は、落とし穴にはまったイノシシを撲殺して仕留めた時の血の固まりを象徴的に表現した可能性が高いと考えられます。

縄文人とイノシシ 藤田富士夫氏は前期～後期の自然環境の変化を踏まえ、呉羽丘陵・射水丘陵の石鏃多量出土遺跡（前期：平岡遺跡、中期：北代遺跡・串田新遺跡、後期：二本榎遺跡）の様相から、長期の狩猟活動で減少したイノシシ等の増殖を促すために集落（狩猟センター）を移動させ、個体数の回復を待つて旧地に戻るといふ、縄文人の自然との共生を読み解きました（藤田 1996）。

縄文人は貴重な動物質食糧としてのイノシシ等を、言わば適正に管理していたのです。イノシシ等は現在、農林業被害・生活環境被害・人的被害など、多様な問題を現代社会に引き起こす有害鳥獣の一つとされていますが、近年はジビエ（狩猟で得た自然の野生鳥獣の食肉）としての活用も注目されています。現代社会でも、縄文人と同様に適正に管理し、共存したいものです。

主要参考文献

- (公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2014 『小竹貝塚発掘調査報告』
富山市教育委員会 1987 「吉作遺跡」『昭和 61 年度富山市埋蔵文化財調査概要』
富山市教育委員会 2014 「吉作遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要ⅩⅠ』
西本豊弘 2012 「人と動物の歴史」『日本史と環境』環境の日本史 1 吉川弘文館
藤田富士夫 1996 「縄文時代の生業活動」『婦中町史 通史編』 婦中町



イノシシの横顔(約3分の2)



強調された表現(装飾模様)
血の固まりの表現